「大学生研究フォーラム 2008」報告

日時：2008 年 8 月 2 日（土）　9:45～18:15
場所：京都大学百周年時計台記念館
主催：京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会
報告者，報告日：黒田祐二（学術教養センター），2008 年 8 月 6 日報告

Ⅰ．フォーラム全体の目的

京都大学高等教育研究開発推進センターと（財）電通育英会が 2007 年に実施した「大学生のキャリア意識調査」の結果を基にして，「現代大学生のキャリア意識の特徴を明らかにすること」，及び，その特徴を踏まえつつ「大学生のキャリア形成のあり方を探ること」。

Ⅱ．フォーラムの構成

「１．これからの大学教育が育てる人材像（基調講演）→２．現代大学生にみられるキャリア意識の特徴（パネルディスカッション Part1）→３．これからのキャリア教育に関する示唆（パネルディスカッション Part２）」という構成。

加えて，１～３のテーマに関連して，１つの講演があった（４種類の講演の内１つを選択受講する形。報告者は「青年期論からみた大学生の成長―何が課題か―」を受講）

Ⅲ．フォーラムの具体的内容

１．これからの大学教育が育てる人材像（基調講演）

2008 年春の中央教育審議会大学分科会答申における「学士力」が，育成すべき人材像の１つに挙げられるだろう。学士力とは以下の通り。

（１）体系的な知識の獲得と理解
（２）汎用的技能（コミュニケーションスキル，数量的スキル，情報リテラシー，論理的思考力，問題解決力）
（３）態度・志向性（自己管理力，チームワーク・リーダーシップ，倫理観，その他）
（４）統合的な学習経験と創造的思考力

２．現代大学生にみられるキャリア意識の特徴（パネルディスカッション Part1）

「大学生のキャリア意識調査 2007」の結果やその他の類似する調査の結果に基づきながら，現代大学生のキャリア意識の特徴と問題点が，異なる専門（青年心理学，教育社会学，職業心理学，教育学）をもつ４名のシンポジストにより報告された。特に，「大学生活」（学業，対人関係，サークル，アルバイト，ボランティア，趣味など）と「人生」という，２

つのライフの視点から大学生のキャリア意識やキャリア形成を捉える必要があるという考えのもと，それぞれのライフにおいて大学生がどのような意識や態度をもっているか，要点が報告された。

（１）大学生活における意識・態度：「何事もほどほどに」という大学生活を送っている学生が多い。また，「勉強第一」という学生も多い。

（２）人生に対する意識・態度：「だいたいの将来設計はもっている」が，「漠然としていてつかみどころがない」と考える傾向のあること，「７割強の学生が将来の見通しをもっている」が，それらの学生の多く（６割以上）が「見通しを実現するためにすべきことはわかっているが実行できていない」もしくは「見通しを実現するために何をすればよいかがわからない」状態である。

（３）（１）と（２）の関係：

①大学でのキャリア教育は将来の見通しやその実現のための努力を高める傾向がある。ボランティアやインターンシップ，参加型授業への参加も同様の傾向がある。

②大学での日々の勉強や友人関係，サークルはキャリア意識の形成と切り離せない。それらの中で「主体的に関与し活動できること」が，キャリア意識の形成に影響を与えるのではないか。

③大学時代は「モラトリアム」の時期で，広範な大学生活の中で様々な体験や試行錯誤をしながら人生やキャリアに対する意識が作り上げられるのではないか

３．キャリア教育に関する示唆（パネルディスカッションPart２）

キャリア教育の問題点や今後の教育への示唆が，４名のシンポジストにより報告された。

（１）キャリア教育は，「就職指導」や「出口指導」というより，「人生（将来）設計への支援」や「プロセス指導」である。

（２）現状のキャリア教育においては，以下の３点が課題である。①キャリア教育の効果を高めるために：キャリア教育のカリキュラム上あるいは制度上の系統化が必要。具体的には，キャリア科目の正課教育と正課外教育との連携，キャリア教育を行うに当たっての教養・専門教育との間の連携や部署間の連携を考える必要がある。また，キャリア教育でどのような内容や体験を提供し，学生がそれを将来に活かせるようにするためにはどのようにすればよいかを考える必要がある。②キャリア教育の捉え方：キャリア教育は，多数の学生に１つの共通事項を講義する教養・専門教育と異なり，１人１人の特性やニーズを把握してそれに応えていくという「個別支援的な営み」である。この視点をもって学生を教育できるかどうかということが必要。③学生のキャリアに関する学びを体系化するために：個別的支援と系統的支援をいかに組み合わせるかが問われる。例えば，カウンセリング的アプローチとエンロールメント・マネジメント（例：入学～卒業までの学生の変化や成長を体系的に捉えられるように部署間の連携をとる，ポートフォリオを作るなど）を統合して教育していくなど。

（３）（２）の③に関連して，キャリア教育においては学生の「個人差」を理解した上で教

育を行うことが必要。上記２で論じられた「将来の見通し」と「その実行」ができている学生とできていない学生がいるが,「それぞれの段階や特徴に応じた」教育が必要。

（４ ）２において大学生活（日常生活）と人生（将来）との関連について報告されたが，大学生活や日常生活の全てを将来の人生設計のために費やすのはむしろ問題。今現在やりたいことを人生設計とは関係なくやっていくことも必要だろう（→その中で結果的に将来につながることもみえてくることがある。モラトリアム期にいる大学生は，自分のやりたいことをやり，試行錯誤していく中で自分のアイデンティティや進路意識を確立していく)。

（５）１において報告された「学士力」は「出口（大学卒業）の質を保証する」という目的から提案された概念。しかし，学士力を身につけることは，学生の進路や人生設計がうまくいくための必要条件でしかない（十分条件ではない)。例えば，個人の力があっても，実際の就業は労働力の需給関係に依存してしまうところがあったり，労働市場が求める人材が高い能力をもつ知的労働者と低いスキルでもよい感情労働者に二分されたりしている。そのため,「学士力（やそれと関連する「能力」や「スキル」）を育成すればそれでよい」という考え方だけで, キャリア教育を行うのは危険である (「キャリア教育への幻想」)。「個人内の力」や「現在の社会への適応」に焦点化したり，学士力といった抽象的な概念で学生を捉えたりするだけでなく，人間関係（ソーシャルネットワーク）を構築できる，既存の社会の変革を考えられる，多様性や個性を考え活かせる，といった視点も必要。

（６）キャリア教育がうまくいくかどうかは，教員の大学教育に対する意識の問題や大学のあり方の問題と大きく関わっている。エリート養成や高等専門教育という従来の大学教育観から，学生の実情を踏まえ，専門性を備えたバランスある高度な教養人・市民を育成するという新しい大学教育観に転換ができていることと，キャリア教育を全学的な取り組みとして行っていくことが必要。

（７）大学入学前のキャリア形成・教育も重要である。大学入学前後の接続について今後検討していかなくてはならない。

４.「青年期論からみた大学生の成長―何が課題か―」

大学生は青年期にいる。青年期の課題はアイデンティティの探求と確立にある。このことを考慮し，大学教育は，単に「学生指導」という視点のみならず「青年期教育」という視点をもつことが必要である。つまり，専門的知識や技術を教育するのみならず，青年としての大学生が自らのアイデンティティを探求したり人生に対する意識や見通しを形成したりできるような支援や教育が必要となる（→アイデンティティの探求の中でキャリア形成がなされることを考えると，青年として大学生を捉え教育を行うことに意味がある)。